

ヘミングウェイの戦傷体験にみる幻想的イメージ

——「知恵の真髄を自覚する瞬間」——

Visiary Image of Hemingway's War Injury Experience ——A Moment to Become Aware of the Essence of Wisdom——

金井 治
KANAI Osamu

Abstract: This article considers Hemingway's visionary images of his war injury experience. At the Italian front during World War I, Hemingway was seriously wounded and he felt "my soul came into my mouth." This is called out-of-body experience, which is characteristic of the near-death experience. This paper examined what he meant by those words and how the experience influenced his later works.

Keywords: Hemingway, war injury experience, visionary image, out-of-body experience, near-death experience.

ヘミングウェイ、戦傷体験、幻想的イメージ、体外離脱現象、臨死体験。

(はじめに)

ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) は、第1次世界大戦のイタリア戦線でアメリカ赤十字の中尉として、傷病兵輸送という任務を帯び従軍した。そして、オーストリア軍の迫撃砲弾によって瀕死の重傷を負う (1918年7月8日)。そのとき、彼は生死の狭間で「私の魂が口の中に飛び出してきた」という、幻想的なイメージにとらわれる。これは、臨死体験をしたときなどに見られる「魂の体外離脱現象」と呼ばれているものに酷似している。そこで、本稿では、ヘミングウェイ作品にみられる幻想的なイメージ描写が、彼の臨死体験を表現したものであることを論証してみる。

1、『武器よさらば』の戦場での負傷描写

ヘミングウェイの戦傷体験を最も詳細に描いている作品といわれる『武器よさらば』 (*A Farewell to Arms*)¹では、負傷場面が次のように描かれている。それは、塹壕の中で兵

隊たちと食事中の出来事で、そこにオーストリア軍による迫撃砲弾の直撃を受けたのである。

then there was flash, as when a blast-furnace door is swung open, and roar that started white and went red and on in a rushing wind. I tried to breathe but my breath would not come and I felt myself rush bodily out of myself and out and out and out and all the time bodily in the wind.²

それから、溶鉱炉の戸がぱっとあいたときのような閃光があり、大音響があり、はじめ白くなったが、それから、赤くなりぐんぐん烈しい風につつまれた。ぼくは呼吸しようとしたが、呼吸できず、からだかぼくのところから、ぐん、ぐん、ぐん、ぐん、しょっちゅう、からだごと、その風のなかにとびだしてゆくように感じた。³

主人公ヘンドリックの戦場での負傷場面を、このように具体的に細かく描写している。砲弾の直撃を受けて、呼吸もできない状態のなかで、自分の体が爆風のなかに飛び出していく様子を語っているが、「自分の体が風のなかに飛び出す」(all the time bodily in the wind)、とは、どういうことだろうか。

このあと、じつは「これらはまったく一瞬のことで⁴」(all this in a moment)と述べている。そして傍らで負傷して泣き叫んでいる兵隊を助けようとするが、自分の足が負傷してまったく自由が利かないのに気づくのである。さらにヘンドリックは病院に収容されて、軍医の診断を受ける。その結果、「左右大腿部、左右膝関節、および右足に多数の外傷、右膝関節および足に深部傷、頭に裂傷」と、「頭蓋骨に骨折の疑いあり」と言い渡される。つまり、身動きできない状態なのに、自分では「それから、ふわり、ふわり、動いた。前に進まないで、からだかうしろに滑っていくように感じた⁵」(Then I floated, and instead of going on I felt myself slide back)という。

これらの描写は一見リアルな感じを受けるが、はたしてそうだろうか。おそらく、本人自身は被弾した瞬間に気絶しているはずであり、まさか、目をあけて自分自身の動きを観察していたわけではないであろう。しかし、このようにその状況をあたかも実況放送をするがごとく表現していることに筆者は注目するのである。

マイケル・レイノルズ (Michael Reynolds) は、『ヘミングウェイの方法』(*Hemingway's First War*)⁶で、「明らかにこの体験は、1918年ピアーヴェ川で被ったヘミングウェイ本人の負傷に根差している。……ヘミングウェイがこの原体験を、これほど仔細に描写した作品はこれまでなかった。この負傷を精神的外傷と信じ込んでいる批評家がいるが、もしそうであったとすれば、正直に書くのは困難な場面であったろう」⁷と述べている。つまり、レイノルズは戦傷体験がトラウマであれば、ヘミングウェイは思い出すことに困難を来すことに言及し、他の要因を示唆しているのである。

2、『ラブ アンド ウォー』の戦場での負傷状況

次にヘミングウェイ自身が自ら語る負傷状況を見てみる。それは『ラブ アンド ウォー』(*Hemingway in Love and War*)⁸に記されている。この本は著者のヘンリー・ヴィラード(Henry Villard)が、ヘミングウェイと病室が一緒に親しくしていたこともあり、ヘミングウェイ研究の貴重な証言記録として、高い評価を得ている。それによると、戦場で一命を落としかける感じとは、どういうものだったのだろうか、との問いかけに対して次のように語っている。

“It was like the blast from a furnace. There was a deafening roar My knee felt warm and sticky. I was covered with blood, my blood and that of the Italian. I tried to breathe and I couldn't.”⁹

「あれは溶鉱炉から熱風が噴き出してきたような感じだったな。それから耳を聳するような轟音に包まれて、膝のあたりに、生暖かい粘ついたものを感じたね。ぼくは血まみれになってたんだ。それは、ぼくの血と、あのイタリア兵の血だった。呼吸をしようにもできなかった。¹⁰

『武器よさらば』での負傷描写と比較してみると、比喩的なイメージである「溶鉱炉から熱風が噴き出してきたような」(as when a blast-furnace)という部分は、このヘミングウェイ本人の証言(It was like the blast from a furnace)とほぼ同じである。それでどうなったかという、ヘミングウェイは次のように述べる。

That fearful sensation of having the wind knocked out, as if by a blow to the solar plexus, has been described many times in many ways, but if I had then known about the legendary Persian character named Hajji Baba I would have had a parallel in Hajji's graphic expression “my soul came into my mouth.”¹¹

「ぼくがもしあの頃ハジ・ババという伝説的なペルシャ人のことを知っていたら、彼の生々しい表現がぴったりだと思っただろうけど。こういう表現なんだ。それは——“私の魂が口の中に飛び出してきた”が、ヘミングウェイは彼なりの表現で明瞭にその瞬間を説明してくれた。「ぼくはすぐ気絶してしまっ、自分は死んだんだと思った。呼吸が止まったら、死んだも同然だろう。でも、それから呼吸が戻ってきて、ぼくは生き返ったのさ」¹²

このようにヘミングウェイは、伝説的なハジ・ババというペルシャ人の表現を借りて「私の魂が口の中に飛び出してきた」(my soul came into my mouth)という幻想的な瞬間が

明瞭にあったという。この幻想的な表現は、捉え方によっては深い意味を有することに結びつく。それは、この幻想的な表現を突き詰めると、意識、あるいは魂が自分の肉体から離れることを意味していると思われるからである。通常、このような状況は意識、あるいは魂の体外離脱（The outside the body secession）とか、幽体離脱（An astral projection）などと呼ばれ、臨死体験（near-death experience）時に見られる特有な現象でもある。臨死体験とは何か、について立花隆は、『臨死体験・上』¹³で端的に次のように定義している。

臨死体験というのは、事故や病気などで死にかかった人が、九死に一生を得て意識を回したときに語る、不思議なイメージである。三途の川を見た、お花畑の中を歩いた、魂が肉体から抜け出した、死んだ人に出会ったといった、一連の共通のパターンがある¹⁴

ヘミングウェイの場合も、被弾して意識を失ったときに、「魂が口の中に飛び出してきた」という体験をしていて、臨死体験における共通パターンに符号するのである。さらに、ヘミングウェイはその後の状況について、次のようにも語っている。

“I went out fast and thought I was dead. When you have no breath, you're dead. Then I was able to breath again and I was back.”¹⁵

彼は気絶してしまって、呼吸が止まり、自分は死んだと思った。しかし、それから呼吸が戻ってきて生き返った、というのである。この証言は、まさに臨死体験そのものであろう。すなわち、一度死にかけて、この世に戻ってきた、という明確な意識があるのは、臨死体験者特有のものだからである。臨死体験を最初に本格的に研究し『かいまみた死後の世界』¹⁶を著したアメリカの精神科医レイモンド・ムーディ(Raymond Moody,1944)は、臨死体験の構成要素として次の11項目を挙げている。

- (1) 体験内容の表現不可能性
生前には経験したことがない神秘的な出来事に遭遇するため、適切な表現、説明がしにくい。
- (2) 死の宣告を聞く
医師が本人の死を、遺族などに宣告しているのを聞いている。
- (3) 心の安らぎと静けさ
怪我や病気などによる一切の苦痛から解放され、自分の意識が極めて平穏な状態にある。
- (4) 異様な騒音

自分の意識（魂）が体から抜け出して、空中に漂うときに複雑で異様な騒音を聞くことがある。

(5) 暗いトンネル

自分の意識（魂）が体から抜け出して、死の方向へ向かうときに暗いトンネルを通過するケースが多い。

(6) 体外離脱

自分の意識（魂）が体から抜け出す（遊離する）ことを自身が実感するのが、臨死体験の大きな特徴。

(7) 他者との出会い

自分の意識（魂）が体から離脱して、死の方向へ向かう途中で、すでに他界した親や親しかった人に出会う現象。

(8) 光との出会い

自分の意識（魂）が体外離脱して、死の方向へ向かう途中で、光に包まれた聖者に出会う現象。

(9) 人生回顧

自分の意識（魂）が体外離脱して、死の方向へ向かう途中で、自身の全人生の言動を走馬灯のように見せられる現象。フラッシュバックともいう。

(10) 生と死の境界線との出会い

お花畑や川などのケースが多い。

(11) 生還

生と死の境界線で、聖者などから元へ戻るようにいわれて、自分の意識（魂）が再び体に入ることによって生き返ることになる。

これらを総称して臨死体験と呼ばれているが、ただし、臨死体験をした人が、ここに挙げた11の項目のどれとどれを体験するかは、人によって異なるという。ヘミングウェイの場合は、(1) 体験内容の説明不可能性、(6) 体外離脱、(11) 生還など3項目が該当しているようである。

3、「身を横たえて」にみる幻想的イメージ

ヘミングウェイが戦傷体験後に、幻覚的な症状に悩まされることを描いた作品がある。「身を横たえて」“Now I Lay Me”¹⁷では、主人公ニックが夜になると、しばしば起きる不思議な現象について、次のように語っている。

I myself did not want to sleep because I had been living for long time with the

knowledge that if I ever shut my eyes in the dark and let myself go, my soul would go out of my body. I had been that way for long time, ever since I had been blown up at night and felt it go out of me and go off and then come back.¹⁸

ぼく自身は、眠りたいとは思わなかった。なぜなら、暗闇の中で目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が体から遊離してしまうという考えに、それまで長いあいだとりつかれていたからだ。ある晩砲弾に吹っ飛ばされ、魂が体から抜けだして、いったん遠くに漂ってからもどってきたのを感じて以来、ずっとだ。¹⁹

ヘミングウェイは戦場での臨死体験後、このように暗闇のなかで自身の魂が、自分の肉体から抜け出すという現象が頻繁に起こることを、かなりリアルに感じていたようである。被弾体験の後遺症として、本人にとってはさぞや不気味な現象であったろう。こうした魂（意識）の肉体からの離脱現象は、臨死体験の研究が進んでいる今日、ある程度は一般的にも理解されているかと思う。しかし、その当時はオカルト的な現象としか思えなかったのは当然であろう。

次に、ヘミングウェイの戦場での臨死体験は彼の創作活動において、どのような影響を及ぼしたかについて検証する。

4、戦場での臨死体験と創作活動への影響

ヘミングウェイは被弾から30年以上たった1952年に、創作活動への影響について自ら次のように語っている。（島村法夫『ヘミングウェイ・人と文学』）²⁰

アーネストは若き学徒チャールズ・フェントンの間に答え「何であれ戦争の経験は作家に計り知れない価値がある。だが、あまり経験しすぎると、破壊的な危害を加えるものである」（フェントン『ヘミングウェイの修行時代』）と告白している。²¹

さらにリリアン・ロスのインタビュー記事（『ニュー Yorker』誌1949年11月）では、次のように記されている。

「ぼくは最初の戦争があまりにも恐ろしかったので、十年間もそれについて書けなかったのを思い出す」と彼はすごい剣幕で言った。「戦闘が作者に及ぼす傷は、癒すのに非常に長い年月が必要だ。昔そのことについて三つの物語を書いた。『異国にて』と『身を横たえて』それと『誰も知らない』だ。」（『ヘミングウェイの肖像』）²²

これらヘミングウェイ自身の証言からも、戦傷体験が彼の創作活動に大きな影響を与え

たことは明白である。そして被弾による臨死体験が、ヘミングウェイの創作活動のバックボーンとなって、さまざまな形で作品に昇華されていることも見逃すことはできない。

それを示すケースとして、『武器よさらば』の最終章に、こんな場面がある。出産がはかどらずに衰弱したキャサリンが、ベットの傍らで見守る主人公のヘンドリックにつぶやくのである。

“I’m going to die,” she said ; then waited and said, “ I hate it. ” (中略)
Then a little later, “ I’m not afraid. I just hate it. ” ²³

ヘミングウェイは臨終間近のキャサリンに「死ぬのが怖くない」(I’m not afraid)と、言わせている。このセリフは見方によっては、意味深長なものがある。それは、臨死体験者の特徴の一つに「死への恐怖心がなくなる」ということが挙げられているからである。通常、「死ぬのが怖くない」などとは安易に言えないセリフであり、臨死体験者である作者の心象を投影したとも考えられる。ヘミングウェイの「生と死の狭間」について、島村はこんな指摘をしている。

「死ぬる日は、生まれる日にまさる」と「伝道の書」にある。なぜなら、「生きている者は、これを心にとめる」(第7章1,2節)からである。おそらく、アーネストはこの『旧約聖書』の伝道者が語る知恵の真髄を自覚する瞬間があったと思われる。²⁴

ここでいう「知恵の真髄を自覚する瞬間」こそ、まさにヘミングウェイが被弾した瞬間であり、それは臨死体験だったともいえよう。臨死体験をした人は、その瞬間に「知恵の真髄」なるものを、自覚するのであろうか。

5、まとめ

本稿ではヘミングウェイが戦傷体験したときの「生死の狭間での幻想的なイメージ」について、考察してきた。それは臨死体験時にみられる特徴的な現象であり、体験者特有のイメージであることを指摘した。それとともに臨死体験者は押し並べて、「人間生命の永続性を覚知する」ことに結びつく、ともいわれている。また、ヘミングウェイは臨死体験によって、「知恵の真髄を自覚する瞬間」を得たと思われるが、その原体験こそ彼の創作活動に大きな影響を与えたことは想像に難くない。さらに、ヘミングウェイが臨死体験で得たことを、彼の創作活動の随所に表現し、作品に昇華しているように思われるのである。

(注)

- 1 ヘミングウェイ、高村勝治訳『武器よさらば』講談社文庫、1965。
- 2 Ernest Hemingway, *Farewell to Arms*, Simon & Schuster, 1995. p.54.
- 3 前掲書、p.76。日本語訳はすべて高村勝治訳による（講談社文庫版）
- 4 前掲書、p.76。
- 5 前掲書、p.76。
- 6 マイケル・レイノルズ (Michael Reynolds) , 日下洋右・青木健訳『ヘミングウェイの方法』(*Hemingway's First War*) 彩流社、1991。
- 7 前掲書、p.45-6。
- 8 ヘンリー・S・ヴィラード、高見浩訳『ラブ アンド ウォー』(*Hemingway in Love and War*) 新潮文庫、1997。
- 9 Henry Villard, James Nagel, *Hemingway in Love and War*, Hyperion, 1996.
- 10 前掲書 p.50。日本語訳はすべて高見浩訳による（新潮文庫版）。
- 11 前掲書 p.24。
- 12 前掲書 p.50。
- 13 立花隆『臨死体験・上』文春文庫、2000。
- 14 前掲書 p.9。
- 15 前掲書 p.24。
- 16 レイモンド・ムーディ(Raymond Moody, 1944)、中山善之訳『かいま見た死後の世界』評論社、1989。
- 17 ヘミングウェイ、高見浩訳『ヘミングウェイ全短編1』新潮文庫、2003。
- 18 *The Short Stories of Ernest Hemingway*, Charles Scribners Sons, 1966。 p.363.
- 19 前掲書 p.443。
- 20 島村法夫『ヘミングウェイ・人と文学』勉誠出版、2005。
- 21 前掲書 p.35。
- 22 前掲書 p.36。
- 23 前掲書 p.330。
- 24 前掲書 p.128。

(参考文献)

- 今村楯夫『ヘミングウェイを追って』求龍堂、1995。
ウィリアム・ジェームズ、比屋根安定訳『宗教経験の諸相』警声社書店、1921。
キューブラー・ロス、鈴木晶訳『死ぬ瞬間と臨死体験』読売新聞社、2002。
高見浩『ヘミングウェイの源流を求めて』飛鳥新社、2002。
立花隆『臨死体験・上』文春文庫、2000。
立花隆『臨死体験・下』文春文庫、2000。
ノベルト・フエンテス、宮下嶺夫訳『ヘミングウェイ キューバの日々』晶文社、1988。